airiti

淡江盃日本語ディベート大会
—「コミュニケーション」とは何か？

冨田哲*

1．はじめに

淡江盃日本語ディベート大会(以下、「淡江盃」と称する)は 2015 年 5 月に第 5 回目をむかえる。この大会は大会規則の第 1 条に「説得力及びコミュニケーション力を重視」することをかかげ、私たち主催する側もことあるごとに本大会の特徴として「コミュニケーション」の重要性を強調してきた。「バトル」ではなく「コミュニケーション」をめざすディベートを、などと言うと、「じゃあなぜ勝ち負けをつけるんだ」と言われてしまいそうだが、コミュニケーションが淡江盃を立ち上げるにあたっての柱となり、今日にいたるまで大会の基本理念であり続けていることはまちがいない。

ただバトルではあっても、相手がいる以上、それはコミュニケーションの一種であるという考え方もなりたつだろう。だとすれば、本大会がめざすコミュニケーションとは、いかなるものなのだろうか。実は、第 3 回大会の際、ある参加校の先生から、「コミュニケーションって何なんでしょうね」という問われたことがある。そのときは、「自分とはことなる立場にある相手の言っていることをまず聞くこと、そしてそれに対してみずからの意見を相手が理解できるよう伝えること、それによって両者のあいだで対話が成立している状態」といった趣旨のお答えをしたように記憶しているが、ご満足いただけるような答えになっていたという自信はない。

今回、東海大学日本語言文化学系から淡江盃について執筆する機会をいただいた。もちろん淡江盃がどのような大会なのかを紹介することになるが、それとともに、あらためてコミュニケーションとはいったい何なのか考えてみたくなった。淡江盃はコミュニケーション重視をかかげることによってどのような大会をめざしてきたのか/めざしているのだろうか。以下では、まず

airiti

第 2 節でこれまでの淡江盃の足どりや特徴などについて述べ、続いて第 3 節で淡江盃におけるコミュニケーションの意味を検討してみたいと思う。

2．淡江盃について[1]

交流協会の主催で、大学生が参加する日本語ディベート大会が始まったのは 2004 年のことである[2]。その後、多数の参加校を集めて大会は継続し、淡江大学も毎回参加していた。私は大会の実行委員として運営にたずさわってもいたが、大会のルールが競技としてのディベートにかたむいており、日本語をまなぶ学生向けのものになっていないのではないかとの声が関係者のあいだであがっていた。そこで、2009 年と 2010 年には従来のルールの部門(政策論題部門)と新ルールの部門(一般論題部門)にわかれて大会が実施された[3]。

2011 年にはそれぞれの部門を引き継いだ大会が別個に開催されることになった。一般論題部門を引き継いだのが、淡江大学日文系が主催した「淡江盃全国日本語ディベート大会」で、翌年には東海大学日文系と淡江大学日文系が共同で「全国日本語ディベート大会」を、以後は毎年、「淡江盃日本語ディベート大会」の大会名称で開催している。ただ、淡江および東海の教員からなる大会実行委員会では、2011 年以降は同一の大会と認識して通しで回数を数えており、淡江大学および学外団体への支援の要請の際も大会名にその回数を冠している。

冒頭で一部引用したが、本大会規則の第 1 条は淡江盃の目的を次のようにうたっている[4]。この条文は第 1 回から変わっていない。

> 本大会は、台湾の高等教育機関で日本語を学ぶ学生の日本語能力、及び論理的思考能力、批判的思考能力、傾聴能力、情報収集・分析・活用能力、口頭発表能力の向上にディベートを通して寄与すること、また、説得力及びコミュニケーション力を重視し、日々の日本語学習活動の活性化を図ることを目的とする。

この目的は二つにわかれている。前半部分では、準備過程をふくむディベートへの取り組みが、学生の各種「能力」の向上につながることを期待している。一方、後半部分は、淡江盃がどのような「力」を重視しているのかを明示し、そうした方針が大会での判定にとどまらず、参加学生や教員をとおして日常の日本語教育の場にも影響をあたえることを期待するものである。

airiti

「能力」と「力」を意図的に使いわけたのかいなか、規則の作成にたずさわったメンバーの一人である私自身、覚えていないのだが、かかげられたさまざまな「能力」の向上によって、他人を「説得」したり他人と「コミュニケーション」したりする「力」が生み出されるはずであり、そしてそれらが日本語教育の現場でもっと強調されてもいいのではないかというのが、この目的の言わんとしていることだと私は理解している。

この目的の達成のためには、大会の規則がすべての参加者にとってわかりやすいものになっている必要がある。すなわち、大会に参加する学生や教員にとって、どうすれば審判の高評価が得られるのか明確になっていること、審判にとって判定の基準が明瞭であること、日本語ディベートになじみのない学生や教員に対しても広く開かれたものになっていることが肝要である。

そして、そのかぎは結局、学生や教員が「日々の日本語学習活動」との連続性をどれだけ意識できるかということにあるのではないだろうか。参加者が淡江盃で求められるもの、あるいは求めるものが、日常の学習・教育現場から遊離してしまっていては、当然のことながら参加を決めるまでのハードルは高くならざるをえないだろうし、大会の継続的な発展も難しい。

では、上記の課題をクリアすべく、淡江盃が具体的に工夫していることをいくつか紹介したい。なお、試合の流れ(本大会規則「第 9 条　試合の流れ」)を本稿の末尾の資料 I として図示しておいたので適宜参照いただきたい。

2－1 論題

本大会規則の「第 2 条　論題」は、「本大会の論題は政策論題、価値論題、事実論題を問わず、さまざまなテーマを論題とする」となっている。第 1 回から第 5 回の淡江盃の論題は以下のとおりである。

第 1 回:台湾の小学校における英語教育は是か非か。

第 2 回:台湾社会には現在のように多くの修士・博士が必要か。

第 3 回:政府は「紙銭」の販売価格に一定の補償金を上乗せすべきである。

第 4 回:大学日本語学科の卒業要件として日本語能力試験を課すことの是非。

第 5 回:SNS の普及はわたしたちの社会にとってプラスかマイナスか。

airiti

第 2 条の三つの分類にしたがえば、淡江盃の論題は第 3 回が政策論題、他は価値論題ということになろう。2008 年までのディベート大会では、現状を改変させる政策なり計画なりの是非を討論する政策論題が採用されていた。その後の一般論題部門の設置や淡江盃の立ち上げの背後に、政策論題ディベートに対する一定の疑問があったことは事実だが、だからといって政策論題を全否定してきたわけでもない。ただ、日本語学習の延長としてのディベートという観点から、学生にとってできるだけ身近に感じられる論題、活発に討論できる論題をと考えた結果、価値論題が多くなったのだと思われる。「価値に関するディベートは、情報量というよりむしろ問題の内包する価値観と論理の展開が重要となるので、限られた時間内に少ない情報量でおこなう教育ディベートにおいては適してい」ると茂木秀昭は指摘しているが[5]、たしかにディベート未経験の学生がほとんどで、使用言語も学習中の日本語であることを考慮すれば、価値論題が多くなるのも自然なことだろう。

ただ、勝敗の判定をしない、あるいはするにしてもそれが重大な意味を持つ可能性の少ないであろう授業でのディベートならともかく、淡江盃は学生たちに対して勝ち負けを厳然と示し、上位チームや優秀なディベーターを表彰する大会である。教育現場の延長を標榜しつつも、それが競技性をともなったディベートの大会であることは否定のしようがない。だとすれば、ことなる価値観の主張のいずれがすぐれているのかを判定することがそもそも可能なのか、かりに可能だとして、主張をサポートする十分な客観的な論拠を提示することができるのかという疑問は避けられない[6]。今後も論題の選定にあたっては、価値論題、政策論題をふくめてさまざまな可能性をさぐる必要があるし[7]、かりに価値論題が多くなるとしても、それが明瞭、公正な判定を可能にするものであるかいなかを熟慮しなければならない。

2－2主張カード

「第 6 条　試合開始前の提出物」は、「主張カードには、主張の要点を最高 3 点まで、個々の要点につき 20 字前後で明確にわかりやすく記述しなければならない」と規定している。主張カードは試合開始前に相手チームおよび審判にわたされる。当然のことながら、立論はこの主張にそっておこなわれなければならず、かりに主張カードに書かれていない主張がおこなわれた

airiti

り、逆に主張カードに書かれているにもかかわらず立論で主張されなかった場合には、いずれも無効となる(「第 10 条　立論」)。

おそらく通常のディベートにおいて、事前に立論の要点を相手に知らせることはあまりないであろうが、これは相手側の立論を十分に理解したうえで反駁にのぞんでほしいという意図による。試合中には、立論を話す方はもとより聞く方も緊張を強いられることになり、以後の討論の大前提となる主張が十分に相手に伝わらないということも起こりうる。そうなってしまうと、誤解や理解不足にもとづいた反駁がなされてしまうだろうし、さらに再反駁でも「軌道修正」がおこなわれずにまとはずれな討論が続いてしまいかねない。そこで、日本語教育で言うところのプレタスクにあたる作業として、試合開始前にあらかじめ相手の主張の要点を確認し、立論を聞くかまえを作っておくことにしたのである。もっともこれは淡江盃の「発明」ではなく、私の記憶が正しければ、2009 年の大会において、それまでの大会の反省にもとづいて導入された方法である。ちなみに言えば、これはディベーターだけではなく、立論を聞きながら記録のために絶えずペンを走らせなければならない審判にとっても大きな助けとなっているはずである。

ところで、第 3 回大会までは、各チームは試合開始 5 分前に主張カードを司会者に提出し、その後、相手チームと審判にわたされることになっていた。しかしこれでは、要点の記述が不十分だったり、制限字数を大きく超えていたりした場合、当該チームに修正を求める余裕がない(実際、第 3 回大会でこうしたことが発生した)。そこで第 4 回大会では、各チームが一試合ずつ肯定側および否定側になる予選については開会式前に、そして試合前に抽選で立場を決める準決勝と決勝については抽選時に主張カードの提出を求め、担当審判が記述のしかたの妥当性を確認したうえで、試合開始前に相手チームにわたすように方法を変更した。これは有効であったと考えており、第 5 回以降も踏襲するつもりである。

２－３　反論すべき対象の明確化

ディベートにおいては、自分たちとは立場のちがう相手の主張に対して反論がおこなわれる。資料 I にある「マイナスの側反駁」と「プラスの側反駁」は直前にスピーチされたそれぞれの立論に対する反論であるが(「第 11 条　反駁」)[8]、淡江盃ではその次の再反駁の対象を相手側の反駁の内容に限定している(「第 12 条　再反駁」)。再反駁で相手の立論に対する反論を認め

airiti

ていないのは、反論の対象を明確にして討論がかみあうように、また判定がしやすくなるようにという意図による。

資料Ⅱは討論の流れをメモするために審判に配布される「審査員メモ」だが、これを使って説明すると、たとえばプラスの側が提示した主張 A が①、それに対する反駁 A'が③、さらに再反駁 A"が⑤に記入されることになる。マイナスの側の立論→反駁→再反駁も同様で、主張が二点であれば双方二つずつ、計 4 つの討論が左から右に平行に流れていくことになる。こうした形は、若干型にはまりすぎていて、ディベートとしてはおもしろみに欠けるととらえる向きもあるかもしれないが、やはり学生や審判にとっての明瞭さを優先したいと考えている。

２－４　質疑応答の不採用

一般的なディベートでは、立論をスピーチした者と相手側のディベーターとの間で直接、質疑応答がおこなわれる。「質疑応答はディベートの醍醐味」とは、台湾で日本語ディベートに長年たずさわってきたある専門家のことばだが、たしかにそのとおりであろう。

しかし淡江盃ではあえて質疑応答をもうけていない。これは、かつてのディベート大会での質疑応答が、往々にして形骸化したものになっていたように見受けられるからである。たとえば、質問者が時間を節約するため応答途中で相手の発言をさえぎる、答えるのが難しい質問には故意に「わからない」を連発する、立論で言われたメリットやデメリットを機械的に確認する、などといった場面がよく見られた。質疑応答で相手の立論の問題点を引き出し、それを以後の反駁にうまく取り入れてみずからの優位性を主張していくのが理想的なのだろうが、それができていたケースはごく限られていたという印象である。質疑や応答のよしあしが直接、間接に勝敗に影響することもあまりなかったのではないか。

丁々発止の質疑応答に対応できるというのは、たしかに高度かつ実用的な日本語能力の一側面だろう。しかし、それは大多数の学生にとっては、相当に難度の高いことだと言わざるをえない。その結果、むしろコミュニケーションを閉ざそうとするような殺伐としたやりとりが現出してしまうとすれば、やはり採用をひかえたほうがいいのではないだろうか。

２－５　審査の透明性

airiti

学生からすれば、どのような点に力を入れて準備し、またどのようなパフォーマンスをすればより高く評価されるのかが明瞭になるよう、また審判にとっては判定の基準が明確に意識できるようにするための工夫として、淡江盃の判定では資料Ⅲに示した「審査表」をもちいている。審判は上記の審査員メモに討論の流れを記録しながら審査表に点数を記入していく。各ステージごとに評価の項目および基準が決められており(「第 18 条　各ステージにおける評価基準」)[9]、それぞれに 5 点～0 点(0.5 点きざみ)の点数をつける(「第 19 条　各項目の評価方法」)。そして、その点数の合計によって勝敗が決定される。ただ、試合中に記入した点数の合計で即座に判定となるわけではない。終了後の審査会議での協議を経て点数を修正することも可能である。審査会議後、試合会場でディベーターを前にして審判から試合の結果が発表される[10]。

ステージごとの評価項目には若干の違いがあるが、すべてのステージに共通しているのは「日本語能力」(「日本語の語彙、発音、文法は適切か」)と「コミュニケーション」(「わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か」)という項目で、いずれも 20％ずつの配点となっている。これらを評価項目とすることには異論もあろうが、「日々の日本語学習活動の活性化」をうたうディベートとしては、欠かすことのできないものであると考えている。

各ステージの残りの 60％は、立論の「主張カード」の 10％をのぞけば[11]、言うなれば通常のディベートらしい評価項目と言えるだろう。立論・反駁・再反駁では、「話を筋道立ててわかりやすく説明」できたかどうかを問う「論理性」が、立論では 30％、反駁と再反駁では 20％を占めている。さらに反駁・再反駁では「立論／反駁のポイントに関する的確な反駁／再反駁を行なったか」を問う「妥当性」が 20％、また立論・反駁・再反駁・最終スピーチではそれぞれの「強さ」に 20％が割り当てられている。ここでは、各ステージのスピーチがどれだけ強い印象を残したかという主観的な判断を審判に求めている。

「両チームの立論から再反駁までの議論を踏まえて、自分たちの立場が相手の立場より優位であることを訴え、議論をしめくくること」とある最終スピーチであるが、このステージにかんしては頻繁に規則が変化している。第 1 回大会では「再反駁」と「まとめ」が分離していたが、第 2、3 回大会では「再反駁とまとめ」となり、再反駁と全体のまとめを同一ステージでおこなって

airiti

いた。しかし、両方を短い時間内(4 分)でおこなうことは難しいと考え、第 4 回大会ではふたたび「再反駁」(3 分)と「まとめ」(2 分)に分けることにした。

ただ、これまでの「まとめ」では、双方の主張を羅列するだけで終わってしまったり、逆に実際の討論の内容とは関係なく、あらかじめ用意しておいたスピーチを朗読するだけになってしまったりといったことがしばしば見られた。この点はほぼ毎回のように大会後の反省材料の一つとなっており、そのたびにステージ構成や規則の変更をおこなってきたのだが、第 5 回大会ではステージ名を「最終スピーチ」とし、それを「両チームの立論から再反駁までの議論を踏まえて、自分たちの立場が相手の立場より優位であることを訴え、議論をしめくくること」と定義した(「第13条　最終スピーチ」)。評価項目として、「両チームの立論から再反駁までの議論を的確に踏まえていたか」を判定する「総括」(40%)、および「自分たちの立場が相手の立場より優位であることを印象づけられたか」をみる「主張の強さ」(20%。「第 18 条　各ステージにおける評価基準」)をもうけ、討論全体の把握、および自分たちの優位性のアピールの両方が必要であることを強調している。2 分というかぎられた時間なので簡潔かつ的確に要点を述べなければならず、学生にとって依然として難度の高い要求であることは承知しているが、双方の主張を吟味したうえで、最後に自分たちのチームの結論を自信を持って提示するという意気ごみでとりくんでもらいたい。

以上の各ステージにはあわせて 90%の点数が配分されているが、これ以外に「全体の流れ」として残りの 10%が加点される。これは「立論、反駁、再反駁、最終スピーチの各ステージに一貫した流れがあり、全体を通して説得力があったか」が判断されるものである(「第 18 条 各ステージにおける評価基準」)。各ステージのスピーチを項目ごとに採点する淡江盃の方式は、スピーチの「団体戦」にすぎないのではないかという声を以前に聞いたことがある。もちろんそのようなつもりはないのだが、やはりチームとしての主張の一貫性や説得力の有無も評価にくわえるべきだと考え、第 2 回からこの評価を置いている[12]。

3　コミュニケーションとは？

淡江盃のあらましを説明したところで、再度、淡江盃が重視する「コミュニケーションとは何か」という問いに立ち返ってみたい。

airiti

淡江盃にかぎらず、何らかの教育的な活動においておこなわれるディベートが、その目的としてコミュニケーション能力の向上をかかげることは決してめずらいことではない。たとえば、高校や大学の教育現場での「アカデミック・ディベート」の方法を紹介する書籍は、冒頭の章で次のように述べている。

> ディベートは、特殊ではあるがコミュニケーションの一形態である。対戦相手と議論のボールをやりとりしつつ、ジャッジを説得する。自分の考えを伝えるために想像力・創造力を最大限に使って話をする。これは、何かうれしいことや悲しいことがあったときに友達に一生懸命気持ちを伝えようとするのと同じである。つまり、ディベートは日常のコミュニケーションの延長上にあるともいえる。
>
> 共通背景を持たない相手とのコミュニケーションには、直線的で含みのない表現方法が望ましい。でも、どんなに意思疎通を試みても、やはり相手の言っていることが納得いかないことがあるだろう。「外」の相手とはコミュニケーションの方法が違うだけでなく、思考の背景そのものが違っているからだ[13]。

「想像力・創造力を最大限に使」って相手や審判に自分たちの主張を伝えようとする努力は「日常のコミュニケーションの延長上」に位置づけられる、また「コミュニケーションの方法」や「思考の背景」を異にする「『外』の相手」とコミュニケーションは、ディベートにおきかえれば、自分たちとは反対の立場をとる相手とのやりとりと同様であるという。編者は上掲引用に続いて、「ディベートは、どんな相手とも対等にコミュニケーションを取るための訓練」であると結論づけている。

では、そうした日常生活で必要なコミュニケーションの応用としてディベートで養成されるべきコミュニケーション能力の意義とは何なのだろうか。この本では、知らない人や「外国人」(たとえば「アメリカ人」)とのやりとりで自分の考えを伝えたり相手に反論したりすることに慣れていない「日本人」が、「訓練」の対象として想定されているようである。もし「訓練」が成就した暁には、適切なコミュニケーションの方法を使って相手と「対等な」関係で話ができるようになり、またみずからの主張の優位性を相手や第三者に理解させることが可能になるということなのだろう。

airiti

淡江盃の参加者は「日本人」ではないが、以上のようなディベート活動のめざすところに対してとくに異論があるわけではない。これらも、まさに学生たちに身につけてほしい能力であることはまちがいない。ただ、こうしたある意味典型的なディベート活動の効用の主張に対して、いま一つ物足りなさを感じてしまうのも事実である。というのも、コミュニケーション能力が、結局は自分が相手より有利な位置に立つこと(より直接的に言えば、相手を負かすこと)を可能にするものとしてのみ位置づけられているように思えるからである。さきに引いたディベートの解説書の副題「自己責任時代の思考・表現技術」などからも、そうした印象を強く受ける。

たしかに、淡江盃という大会を開催してディベートをおこなう以上、そこに勝敗の判定がともなうことは避けられそうもない。議論というのは本来、結論に向かう協力的で構成的な過程であるはずで、相手の主張を弱めることがみずからの立場を強化することにつながるような敵対的、ゼロサム式のディベートを教育現場に持ちこむことは適切ではない、というブライアン・クリスチャンの指摘に一定の共感を覚えつつ[14]、双方が主張をすりあわせて建設的な結論を導き出すことをそもそも目的としてはいないディベートであっても[15]、いわゆる勝ち負けにとどまらないコミュニケーション力の養成は可能であると考えて、淡江盃を継続している。

勝ち負けにとどまらないコミュニケーション能力として私が重要だと考えるのは、討論の過程で生じうる意思疎通の不調にいかに対応し、そしてそこからどのように対話の回路を開いていくのかという意味での力である。ここまで述べてきたような一般的に言われるディベートの効用は、結局のところ、適切なコミュニケーションの方法を習得すれば、自分の意思や主張が他人に伝わるはずだし、自分が他人より優位な位置に立てるという確信が前提となっているように思う。そこでは、他人との関係において発生するかもしれない深刻な対話の不全や、そうなった場合の対応などには注意が向けられていないのではないか。

ディベートの話ではないが、内田樹が「コミュニケーション能力」について興味深いことを言っている。就職活動中の学生が「これからはもっとも重視されるのはコミュニケーション能力だそうです」と言うのを聞いて、内田はコミュニケーション能力とはいったい何なのかと問う。

内田は数年前、フランスの地方都市のスーパーでマグカップを買う際、レジで店員に何かをたずねられた。内田はそれが聞きとれず、店員も説明するのをあきらめかけたが、気がすまない内田は、「レジの上に身を乗り出して、ひとことひとことゆっくり噛みしめるように」店員が言お

airiti

うとしたことをたずねた。それに対して、店員も「ゆっくり噛みしめるように」郵便番号をたずねたのだと教えてくれた。購入者の居住地のデータをとるためだったという。

郵便番号(code postal)というのは基本的な生活単語である。もちろん私も知っている。でも、それがスーパーのレジでマグカップを買うときに訊かれると、聞き取ることができない。ふつうレジで訊かれるはずの質問のリストの中にその単語が存在しないからである。

これはコミュニケーション不調の一例である。一方において意味が熟知されたこと、当然相手も理解してよいはずのことを口跡明瞭に発語しても、相手が聞き取ってくれないことがある。文脈が見えないからである。「スーパーのレジでは買い物に際して顧客情報をとることがある」という商習慣を知っていれば、文脈がわかる。知らなければ、わからない。

このときに私が肩をすくめた女性店員に向かって、あえてレジに身を乗り出して、ひとことひとこと区切って発語したことで、意味のわからない単語の意味が明かされた。これが「コミュニケーション能力」である。そういうことを顧客はふつうレジのカウンターではしない。

店員は私がフランスの商習慣になじみのない外国人であることを察知して、なぜマグカップを買うのに郵便番号を訊くのか、その理由を教えてくれた。そういうことはふつうレジのカウンターで店員はしてくれない。私は彼女が私のためにこの説明の労をとってくれたことを多とする。これが彼女の側の「コミュニケーション能力」である。

台湾在住 14 年の今日にいたっても、北京語や台湾語を母語と同様に聞いたり話したりすることができない私にとって、これは非常に実感をもって受けとめられる話である。もちろん私の言語能力の低さをたなにあげるつもりはないが、非母語、母語であるとを問わず、状況に対する理解の不十分さが「コミュニケーション不調」を引き起こすことは頻繁にあるだろう。事実、内田はこのくだりの後、日本のスーパーで遭遇した「コミュニケーション不調」の事例も紹介している。

問題の発生が不可避である以上、重要なのはそれが発生したときに何ができるかということである。外国人の顧客である内田と店員が臨機応変に発揮したのは、「コミュニケーションを円滑に進める力ではなく、コミュニケーションが不調に陥ったときにそこから抜け出す力」であっ

airiti

た。この「コミュニケーション能力」のおかげで、「一度は途絶しかけたコミュニケーションの回路は回復した」のである[16]。

私はこうした能力こそ、淡江盃がめざすべきコミュニケーション力ではないかと考えている。

ディベートチームを指導していて、よく「相手が言ったことがまったく理解できなかったらどうすればいいのか」と聞かれる。自分たちが準備したのとはまったくことなる論点や論拠などを相手が提示してきて不意をつかれた場合、おそらくこのようなことが起こるだろう。あるいは、自分たちの聴解能力の不十分さによるところが大きいのかもしれないし、相手の発話能力の問題なのかもしれない。そのいずれかは審判が判断することになるが、たとえば相手の立論が理解できなかったからといって、反駁を放棄するわけにはいかない。その場合、正直に「わからない」と相手に伝えることが、まずコミュニケーションの第一歩である。しかし、ただ「わからない」ではもちろん不十分である。立論のどの部分が理解できなかったのか、部分的にでも理解できたとすればそこから何らかの推測が可能だったかどうかなどを述べる必要があろう。それ自体は必ずしも反駁とは言えないスピーチが多くなってしまうかもしれないが、それが反駁ステージで語られることは何ら問題はないし、むしろ推奨されるべきであると考える。こうした対応がなされることにより、途絶しそうなコミュニケーションがふたたび回復する可能性が高まるのではないか。再反駁ステージに立つ者にとっても、そこで該当部分の対話を放棄することなく、さらに対話を続けていくきっかけをつかめるはずである。

反駁ステージにかぎったことではないが、事前の主張カードの提出や反論すべき対象の明確化は、以上のようなコミュニケーション不調を少なくするための工夫であるが、それとともに討論の流れがわかりやすくなることで、コミュニケーション不調が発生した場合の対処を容易にする方法であるとも考えている。

ゲームである以上、相手側の原因で対話の継続が難しくなったとき、それに乗じてみずからの優位性を確保しようとすることを否定する必要はない。しかし、相手との回路を閉ざすことなく優位に立てれば理想ではないだろうか。そうした努力に対しては、各ステージとも、語りかけの態度としては評価項目のうちの「コミュニケーション」で評価されるだろうし、反駁や再反駁では「妥当性」や「論理性」、そして最終スピーチでは「総括」で高得点が与えられることになるだろう。

airiti

ディベートにおいて双方の立場の歩みよりが理論的には存在しないことは受け入れざるをえない。しかし、学生の日常の日本語学習の延長として、そしてかれらの今後の人生につながる何かが得られる場として淡江盃をとらえるならば、立場そのものを近づけることはできないにしても、自分の立場から外へ少し踏みだす努力をうながすようなしかけを大会のなかに組みこみたいと思う。肯定側と否定側(プラス側とマイナス側)が、それぞれの立場でしか物を言うことが許されないにしても、対話の回路を確保すべく、あえて相手の方向へ視線を向けることはできるはずである。

立場がことなる者どうしが「『わかり合う』ためには『立場』が定めるコードを適宜破」らなければならない[17]。肯定側あるいは否定側として準備や実践を経験することで立場のコードを相対化するというディベート一般の効用とともに、白黒間の討論のなかにも相手との対話の可能性をさぐる知的トレーニングの場を淡江盃が提供できないだろうか、というのが第 5 回大会の準備にあたりながら願っていることである。

4　おわりに

淡江盃は、学内予算を主体として、外部団体や企業からの支援もいただきながら開催しているが、決して楽な運営状況とは言えない。一方で、実行委員会には委員長の淡江日文系主任をはじめとして淡江と東海の多数の教員がくわわり、また本学学生も毎回スタッフとして走り回ってくれている。そして何よりも参加校の学生・教員のみなさんや審判を引き受けてくださる先生方のご協力には感謝のことばもない。

今回第 5 回をむかえることになり、ある程度ルティーン化してきた業務もあるが、それでも試行錯誤が続いている。とくに論題や大会規則については毎回頭を悩ませている。とはいえ、かねてより淡江盃がモットーとしてきた日本語学習/教育の現場により密着した日本語ディベート、そして参加者の方々とともに作り上げる大会を今後ともめざしていくつもりである。関係各位からのご意見、ご協力を切にお願いする次第である。

（冨田哲）

airiti

資料Ⅰ　淡江盃の試合の流れ

プラスの側ステージ		マイナスの側ステージ
司会者による試合開始の宣告		
立論	５分	
準備時間　１分 30 秒		
	立論	５分
準備時間　１分 30 秒		
	反駁	３分
準備時間　１分 30 秒		
反駁	３分	
準備時間　１分 30 秒		
再反駁	３分	
準備時間　１分 30 秒		
	再反駁	３分
準備時間　２分		
	最終スピーチ	２分
最終スピーチ	２分	
司会者による双方発言終了の宣告		
審判会議		
審判による試合結果発表		
司会者による試合終了の宣告		

airiti

資料Ⅱ　淡江盃審査員メモ

第　　試合　　プラスの側：　　マイナスの側：

	③ 立論		③－反駁		⑤＋再反駁		⑧＋最終スピーチ
	学校名（　　）		学校名（　　）		学校名（　　）		学校名（　　）
プラスの側論点の展開		→		→			

	②－立論		④＋反駁		⑥－再反駁		⑦－最終スピーチ
	学校名（　　）		学校名（　　）		学校名（　　）		学校名（　　）
マイナスの側論点の展開		→		→			

airiti

資料Ⅲ　淡江盃審査表(本稿で使用するため一部改変。点数記入欄は省略)

第5回淡江盃日本語ディベート大会審査表

第　　会場　第　　試合（プラスの側）　　vs　（マイナスの側）　　審判名：

	項目	説明
プラスの側立論 20	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	主張カード(10%)	立論での主張の重点が主張カードに的確に書かれ、立論の内容が主張カードに矛盾していないか。
	論理性(30%)	論題の背景や現状の問題点を分析するなどし、話を筋道立ててわかりやすく説明できたか。
	主張の強さ(20%)	有効な資料を使ったり、例を出したりして、自分たちの主張を強くアピールできたか。
マイナスの側立論 20	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	主張カード(10%)	立論での主張の重点が主張カードに的確に書かれ、立論の内容が主張カードに矛盾していないか。
	論理性(30%)	論題の背景や現状の問題点を分析するなどし、話を筋道立ててわかりやすく説明できたか。
	主張の強さ(20%)	有効な資料を使ったり、例を出したりして、自分たちの主張を強くアピールできたか。
マイナスの側反駁 25	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	反駁の妥当性(20%)	相手側立論を十分に把握した上で、立論のポイントに関する的確な反駁を行なったか。
	論理性(20%)	反駁に当たり、話を筋道立ててわかりやすく説明できたか。
	反駁の強さ(20%)	有効な資料を使ったり、例を出したりして、強い反駁ができたか。
プラスの側反駁 25	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	反駁の妥当性(20%)	相手側立論を十分に把握した上で、立論のポイントに関する的確な反駁を行なったか。
	論理性(20%)	反駁に当たり、話を筋道立ててわかりやすく説明できた

airiti

		か。
	反駁の強さ(20%)	有効な資料を使ったり、例を出したりして、強い反駁ができたか。
プラスの側 再反駁 25	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	反駁の妥当性(20%)	相手側反駁を十分に把握した上で、反駁のポイントに関する的確な再反駁を行なったか。
	論理性(20%)	話を筋道立ててわかりやすく説明し、結果的に自分たちの主張に結びつけられたか。
	反駁の強さ(20%)	有効な資料を使ったり、例を出したりして、強い反駁ができたか。
マイナスの側 再反駁 25	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	反駁の妥当性(20%)	相手側反駁を十分に把握した上で反駁のポイントに関する的確な再反駁を行なったか。
	論理性(20%)	話を筋道立ててわかりやすく説明し、結果的に自分たちの主張に結びつけられたか。
	反駁の強さ(20%)	有効な資料を使ったり、例を出したりして、強い反駁ができたか。
マイナスの側 最終スピーチ 20	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	総括(40%)	両チームの立論から再反駁までの議論を的確に踏まえていたか。
	主張の強さ(20%)	自分たちの立場が相手の立場より優位であることを印象づけられたか。
プラスの側 最終スピーチ 20	日本語能力(20%)	日本語の語彙、発音、文法は適切か。
	コミュニケーション(20%)	わかりやすく伝えるための発話の速度、声量、語彙の選択、伝えようとする態度は適切か。
	総括(40%)	両チームの立論から再反駁までの議論を的確に踏まえていたか。
	主張の強さ(20%)	自分たちの立場が相手の立場より優位であることを印象づけられたか。
プラスの側全体の流れ　10		立論、反駁、再反駁、最終スピーチの各ステージに一貫した流れがあり、全体を通して説得力があったか。
マイナスの側全体の流れ　10		立論、反駁、再反駁、最終スピーチの各ステージに一貫した流れがあり、全体を通して説得力があったか。

airiti

摘要

每年舉辦的淡江盃日語辯論比賽將於 2015 年 5 月舉行第五屆比賽，其主旨是貢獻日語學習的活化之日語辯論。本論先介紹本比賽的特色，特別以與一般的辯論競賽不同處為主。我們認為淡江盃該為對參賽學生、教員以及評審而非常合理和容易參與的比賽，其方針也反映出比賽規則各方面。接著，我要檢討淡江盃在比賽的目的中明列的「溝通」這個概念。我們常聽典型的辯論的教育上意義；辯論就是與立場和思考不同者討論的訓練，這個當然也是本比賽的意義之一，但我認為淡江盃也可提升另種溝通能力，即沒有做足夠的溝通或溝通不順時脫離困境而修復討論管道這種能力。既然辯論便是一場有輸贏的遊戲，理論上雙方的互相讓步不會發生，不過我期待淡江盃也許提供辯論者踏上乙方立場外面、凝視對方立場的訓練。

---

* とみたあきら／淡江大学日本語文学系／114520@mail.tku.edu.tw

[1]本節は、筆者が以下でおこなった二つの報告の内容をもとにして執筆したものである。冨田哲「淡江盃日本語ディベート大会について」、2012 全國日語辯論聯合研討會(2012 年 11 月 10 日，明道大學應用日語學系主辦，於明道大學)。富田哲，〈日语教学与日语辩论：淡江杯日语辩论比赛的意义及课题〉，2013 年海峡兩岸外語教學研討會(2013 年 5 月 31 日、6 月 1 日，北京大學外國語學院與淡江大學外國語文學院主辦，於延邊大學)。

[2]2001 年に、淡江大学応用日語系が日本語ディベート大会(「淡江大学珍千金日語辯論比賽」。「珍千金」は当時の在籍教員の名前から一字ずつとって組み合わせたもの)を系内の行事として開催し、翌年 4 月には、淡江大学台北キャンパスで、応用日語系、日本語文学系(4 年生)、日本研究所(当時)の学内 3 チームが参加して第二回大会が開催された。私は、淡江日文系の河村裕之、滝澤武とともに、日文系、日研所チームの指導を担当した。

[3]淡江大学は 2009 年には政策論題部門、2010 年には一般論題部門に出場した。

[4]以下で大会規則に言及する場合、その内容はことわりがないかぎり 2015 年 1 月現在のものである。

[5]茂木秀昭『ザ・ディベート―自己責任時代の思考・表現技術』筑摩書房、2001 年、32 頁。

[6]この部分の記述は、第 5 回大会の論題公募に際してある教員から寄せられた意見を参照している。

[7]あることがら、できごとの存在や発生の有無を問う事実論題は「データの有無と解釈に重点が置かれる」ので、教育ディベートには難しいとされる(茂木秀昭前掲書、32 頁)。

airiti

[8]「プラスの側」「マイナスの側」は第５回大会の論題にあわせた言い方であり、論題に応じて「肯定側／否定側」「是の側／否の側」などとなりうる。
[9]淡江盃では、それぞれのスピーチがおこなわれる時間を「ステージ」と称している。
[10]第 4 回大会では、予選と準決勝は各試合 2 人、決勝は 4 人の審判が判定にあたった。
[11]主張カードの記載のしかたにとくに問題がなければ 5 点とするよう審判に要請している
[12]第 4 回大会で「再反駁」と「まとめ」を分離した際、「全体の流れ」の点数配分を 25%から 10%に下げた。
[13]Christian, Brain. 2011. *The Most Human Human: What Artificial Intelligence Teaches Us About Being Alive*.New York: Doubleday. p.179. 日本語版は、ブライアン･クリスチャン(吉田晋治訳)『機械より人間らしくなれるか？―AI との対話が、人間でいることの意味を教えてくれる』草思社、2012 年。同書は淡江大学日本語文学系の内田康氏よりご教示いただいた。
[14]内田樹「コミュニケーション能力とは何か？」、「内田樹の研究室」 http://blog.tatsuru.com/2013/12/29_1149.php(2015 年 2 月 22 日閲覧)。初出は「コミュニケーションの基本」『土木学会誌』99 巻 1 号、2014 年。
[15] この部分の記述は、「2012 年全國日語辯論聯合研討會」(注 1 参照)での石川清彦氏の報告、「ディベートの批判的考察」を参考にしている。
[16]内田樹「コミュニケーション能力とは何か？」、「内田樹の研究室」 http://blog.tatsuru.com/2013/12/29_1149.php(2015 年 2 月 22 日閲覧)。初出は「コミュニケーションの基本」『土木学会誌』99 巻 1 号、2014 年。
[17]内田樹前掲論文。